
コミカルフレンド

ヒサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コミカルフレンド

【Nコード】

N4799H

【作者名】

ヒサギ

【あらすじ】

6月6日、悪魔の日。その日襲来してきた転校生は、変人集いの音神高校の出身だった。！そんな彼女を中心に、始まり始まり、人間模様。

1、転校生

転校生が来ることは予め知らされていた。

朝、鴨野先生は、その転校生について、こう説明をしたのだ。

「女の子だがな、これが頭いいんだ。音神高校から来たからかもな。この前の編入試験は、皆の中間テストと一緒に問題だったが、全て満点で通った」

その言葉に、私達はその顔も名も知らない彼女に賞賛の言葉を送る前に。

彼女に対し様々な期待をする前に。

「音神高校」というその言葉に、戦慄した。

「やばくね?」

昼休み。

いつものメンバー、池田と渡部と一緒に弁当を食べていると、唐突に池田が言った。

「音神から、とか……俺、死んでもそいつと話したくねえ」

「それは、さすがに決めるのが早すぎると思う。音神にだって、ほら まともな人は、きつというはずだよ。変だったら変で、面白いかも」

「どうだか。勉強のしすぎで頭おかしくなってるじゃねえの。面白くないくらい」

「あーそうそう。案外音神で落ちこぼれて転校してきたのかもなー」
それでも止まらない池田の言葉に、渡部も乗っかる。

「やめなよ。その子に会ってもいないのに、言いすぎだよ」

「はっ。安藤は真面目だな」
馬鹿にしたような池田の声。

池田がここまで、音神のことが大嫌いだとは知らなかった。

音神高校。

私たちの高校は、その近隣に存在する。

故に『彼ら』の噂は先輩達の口から沢山拝聴してきた。

いわく、音神の人間は奇人変人の寄り合いだとか。

いわく、音神の人間とはまともな会話ができないとか。

いわく、音神の人間には 近づいてはいけない、とか。

実際、音神と他校のトラブルは耐えないらしく、それについてはたまに行われる朝礼や、何らかの休み前の式で、校長の口から、その一言で持って伝えられる。

『音神高校の生徒には、くれぐれも気をつけるように』

全国有数の進学校と名高い音神だが、近隣からはまるで不良校のように扱われている。実際、受験生も他県からの方が多いうつだ。まあ……仕方ないだろう。

「テニス部ってさ、たまに近隣校との交流試合組むわけ。で、俺らが入る前だから、一昨年くらいかな？ その時の相手が音神だったんだってさ」

いきなり、渡部がそんなことを言った。

「何でお前がそんなことを知ってた？ テニス部じゃないだろ？」

「部活にテニス部と兼部している先輩がいるんだよ。まあ聞け」

池田の問いかけをあっさりと御して、渡部の話は続く。

「で、交流試合の時、連中に会ったんだ、先輩。まあ、お察しの通り変な奴らばっかりだったんだけど それ以上に、強かったってさ」

「強かった？」

私と池田の声が重なる。

「ああ。全員、7-2で負けた。ダブルスもシングルスも」

「……何それ。音神の人が図って、皆同じになるようにしたとか、言っつもりなの？」

「言っつもりだよ。その試合の後、そのキャプテンが、その時のテニス部のキャプテンに向かって『揃えるのは大変でした』って言ったらしい」

揃えるのは大変でした。
何で、そんなことをしたのだろう。

池田も、私と同じ疑問を持ったようだ。

「は？ 音神の奴ら、何でそんな無意味なことをしたんだ？」

「無意味なことを平然とできるから、変人だと思わないか」

渡部はそう返した。

「そんな奴らの心の中なんて、分からないと思わないか」

「……思う」

その言葉で納得したらしい。

「でも、もしその子が、運動部の人だったら、そのくらい強い可能性、あるよね」

「安藤はあくまで音神の弁護をしたいようだな。転校生、女子だからか？」

池田が言う。

「いちいち言葉尻を捕える。ここまで来ると、音神に対してさっきの言葉通り本当に先入観を持ちすぎている、と思えてくる。」

「でも、安藤のは一理ある。確かに、運動部の人間だったら。音神高校は、強豪の部が多いらしいし」

渡部がフォローしてくれた。

これには、2対1で自分以外の味方がいなくなったので池田は黙ってしまった。

そんな感じで 多大なる不安とほんの少しの期待が、私たちに降り積もる。

2、6月6日

6月6日。

この日が悪魔の日と定義されるようになったのは、おそらく『オ
ーメン』が登場してからだろう。

そして、私たち二年二組にとっても　この日は、悪魔というよ
り悪夢の日になる予定だった。

朝8時。

教室の中は喧騒に満ちていたものの、どこか空々しい。まるで演
出しているかのようだ。何を演出しているんだと聞かれると分から
ないけれど　きっとそうだ。

私は自分の席で、おとなしく本を読んでいた。

「千佳^{ちるか}」

と、急に名前を呼ばれ、その方向を見た。

あずみ。

あずみとそのグループが、ドアの前で何かをしていた。

「どうしたの？」

そこまで行って、聞いてみる。

「ちょっと意地悪してあげようかと」

教室の引き戸は、開かないようにつかい棒が既にあった。

「……鴨野先生も入れないよ」

「鴨野はこの際いいの。重要なのは転校生の方。……このくらいの
意地悪も大目に見られないようじゃ、このクラス、やっていけない
ってこと。分かる？」

あずみは意地の悪い笑みが何故かとても似合う。そう思ってみれ
ば、艶やかな長い黒髪や、切れ長の目はどことなく魔女っぽい気が
する。

絶対言わないが。

「ねえ、開かないようにしたんでしょ？ その子がそれで怒ったら……まさか、いじめるってこと？」

それを聞くと、あずみは「それこそまさかよ」と笑った。

「何もしない。その子に対しては何もしない。それだけ」

無視ってことね。

それに対し私は何も言えない。

池田や渡部には反論できたのに、彼女たちには何も言えない。

訳も分からず 怖いのだ。

「で？ 何で私を呼んだの？」

「話し相手にちょうど良かったから。シヨークは絶対こういうのは

駄目って言う」

私は彰子の代わりらしい。

真崎彰子はこのクラスで一番の人気者だ。容姿端麗、成績優秀、

体育苦手しかし温厚篤実 運動神経以外は非の打ち所のない少女。

人気があるのは当然だ。

あずみは彰子の幼馴染だそうだから、彰子の性格をちゃんと理解しているのだろう。

「転校生、どう思う？」

唐突に、あずみが聞いた。

「え？」

「転校生について、どう思う？」

「……多大なる不安とほんの少しの期待、かな」

「千佳らしい」

あずみはまた笑った。

そこでチャイムが鳴ったので、私たちはとりあえず別れた。

つかい棒の存在に気づいていない人はいないだろう。

遅まきながら気づいたらしい彰子は、前から後ろから取り押さえられている。

……あんな反抗しているのに誰からも嫌われていないって、凄いな。

と、鴨野先生が女の子に向かって言った。いや、ダイナミックとかそういう問題じゃないと思う。

しかし、つまりは。

この子が 戸を？

「まずは、お聞きしようじゃないか」

と、いきなり女の子が口を開く。

それは、相手を威圧する声だった。

かるやかなのに、莊嚴な、声。

「誰がこんな真似をしたんだい？」

男のような喋り方のその子は、にこりと笑って聞いた。

全員が目が、あずみに向けられた。あずみは、それでもそつぽを向く。

皆の視線の先に気づいたららしい女の子はあずみの席の前に行くと、

「君なの？」と聞いた。

「あ、あたしはやってない」

「嘘をついている」

即座に彼女はそれを見抜き、

「よろしい。私は今から君が嫌いだ」

とそつげなく言った。

あずみは驚いたような顔で一回女の子を見て、意味が分からないと言いたげに眉をひそめた。

「おい、喧嘩は後にしろ。自己紹介やれ」

たまりかねたのか、鴨野先生が言う。

意外にも、女の子は「了解した」と素直に従い、教壇の横に立つと深々と一礼した。

「私は葦村ミオあしむらという。今後この高校にお世話になる。ぜひとも、よろしくさせて頂く」

女の子 葦村ミオはそう言って、

「特技は、嘘を見抜くことと運動関係全て。たとえば」

いきなり教壇の上に飛び乗ると、そのままジャンプした。

「っ！」

上を見た時にはもう遅く。

後ろを見れば、彼女は彼女の為に用意された空席の机の上に着地していた。

「おい、上履き履いたまま机の上に乗るな」

何故うちの先生は平然としていられるのだろうか？

着席した葦村ミオは、そのまま一礼し、「よろしく」と隣に挨拶した。

隣は、渡部だった。

二つ、予想と違ったことがある。

一つは、彼女は決して変人ではなかったこと。

もう一つは、彼女はむしろ超人と呼ぶべきだったこと。

3、友達

休み時間になり、葦村ミオに最初に話しかけたのは彰子だった。彰子は誰にでも優しい。だから、葦村ミオが彰子の幼馴染に対し見せたあんな振る舞いも平気の平左　　ということはないのだからうけれど。

彰子にとってそれが、葦村ミオを避ける理由になるわけではないのだから。

「葦村さん？　私、真崎彰子。よろしくね」

その瞬間、一気に教室の雰囲気ざわめきからさざめきに変わった。

葦村ミオは彰子を見ると、訝しげな視線を送りながらも「ああ、よろしく」と返した。

「凄いね、朝のあれ。私、運動できないから憧れる」
快活なのは結構、だが頼むから憧れないでくれ。

気づけば、休み時間の喧騒はどこへやら、今この教室で喋っているのは彰子と葦村ミオの二人だけだ。

クラスメートたちの視線が自分たちに向いていることも気づかず、二人は呑気に会話を続けている。

「あれはノリでやった。だから、できたこと自体はたまたまさ」

「凄い！　練習してたとかじゃないんだ！」

彰子はとても楽しそうな顔をした。

「前の学校ではなんて呼ばれてた？」

はつきり音神と言わないのは、やっぱりあの高校に対してマイナスな思いがあるからだと思う。この東榊高校での音神高校の評価は半端なく低い。

「色々。ミオとか葦村とか。基本的に苗字か名前の呼び捨て」

「ふうん……じゃ、ミオちゃん」

葦村ミオは驚いたように顔を上げ、「何で？」と彰子に聞いた。

「呼び捨てだったんでしょ？ だからちゃん付け」

彰子は花のような笑顔になった。この瞬間、その笑顔の虜になったクラスメートが何人いるだろう。彼女の笑顔には男子だけでなく女子も見惚れる。

「私のことは呼び捨てでいいよ」

「真崎？」

「……いやあの、できれば名前の方で」

「苗字被ってないから大丈夫」

空気読め。

多分、全員がそう思ったことだろう。

「どうして転校してきたの？」

「………大した理由じゃない」

「ここで初めて、葦村ミオは口ごもった。

「ふうん？ じゃあ聞かないでおくね」

空気を読んだらしく、彰子はそう言って、聞かないでおいた。

「頭いいんだよね？ 編入試験、満点で通ったって」

「そういえば鴨野先生がそんなことを言っていた。

結局、誰もそのことについて賞賛を送らなかったのだけれど。

「そんなことはない。確かに勉強はしたけど。音神には入れたのだ

って、私が特待生だったからだ」

「特待生？ 運動系？」

「陸上でな」

陸上。

そう言われてみれば、今朝のあのパフォーマンスは、高飛びを彷彿とさせる……かもしれない。

「そうなんだー。確かにミオちゃんが走っている姿って似合いそう
ありがと、と短く礼を言って、それから葦村ミオは 照れたの
か笑ったようだった。

その顔は、意外に可愛かった。

「真崎。暇な時でいいから学校案内してくれないか？」

もう苗字で呼ぶことにしたらしい。

「いいよー。じゃあ放課後、適当に回ろうか」

彰子は快く受諾した。

「あと、真崎。」

このクラスって、いつも静かなのか？」

全員が途端に色んな人と話し始めた。……さすがに、気づかれるとは思っていたけど……気づくのが遅すぎると思う。

その後は喧騒にまぎれて、二人の声はよく聞こえなかった。

ただ、二人をあずみグループが食い入るように見つめていたことが、何となく気がかりだった。

「ミオちゃん！一緒に食べよ」

昼休み。

一人で食べようとしていたのだろう、弁当箱の蓋を今にも開けようとしていた葦村ミオの手を、唐突に現れた彰子は引っ張った。

「ま、真崎」

さすがにこれには彼女も驚いたというより呆れたようだ。

「じゃ、じゃあ、そうしようか」

「こっちこっち」

「え？ここで食べるんじゃない……」

「こっちだよ！行こ」

彰子は葦村ミオの手を引っ張り、そのまま向こうへ行ってしまった。

私達が弁当を食べる時は基本的に渡部の席の周りに集まる。少々困っていた葦村ミオをを眺めるには最適の位置だったから、彼女の姿が見えなくなったのは残念だった。

「ほら、転校生、割と普通じゃん」

二人がいなくなった後、池田に対して、言う。

「アレのどこが普通だ……普通の転校生はドア吹っ飛ばしたり教卓

からあんなジャンプしたりしねえよ」

「でも、陸上の特待生だったって言ってたじゃん。それなら、あのジャンプも」

「普通じゃないよ」

言葉を遮ったのは、渡部だった。

「あんな、安藤。いくら陸上特待つつつてもさ……限度があるだろ」

朝のアレは限度超えすぎ、と首を振る渡部。

「でも転校生、篠原しのはらに喧嘩売るなんて……格好いいぜ」

渡部はそこを評価しているらしい。

ちなみに篠原とはあずみのことだ。

「まあ、確かに、本人前にして嫌いとか言えないよな……俺もそこは認める」

不本意そうな顔で、池田も言う。認めている割には渋面だ。

「ひよっとしたら、この二年次が終わったら、この日は記念すべき日になるのかもしれない」

渡部の言ったその言葉を考える前に、

「ふざけるな！」

そんな、怒声が聞こえた。

向こうの教室の隅。

あそこって 確か、いつも座っているのは、

「ちよつと……何切れてんの？」

あずみ。

葦村ミオは席にも座っておらず、ただあずみと鋭くにらみ合っている。

彰子はその二人に「仲良くして」といいながらも、喧嘩自体は止められそうにない。

「何を言っているんだ。理由はあんたが一番よく分かっているだろ」

「分からない。さっぱり分からないわ」

あずみの取り巻きたちが陰口を互いに囁く。

「意味わかんない人」

「おかしくない？」

「さすが音神」

「黙れ。あんたらは、黙れ」

取り巻きどころかクラス中全員が黙った。

何なんだあの声は。

怖すぎ。

「真崎。悪いが、一緒の昼食は断るよ」

にらみ合いから一旦離れ、それでも鋭い目つきはそのまま、彼女は彰子に向かって言う。

「ミオちゃん！ そんなこと言わないでよ」

「大体、真崎、私とこいつが仲悪いことは初めから分かっていたら？ 朝のこと、見たのだから。何で、連れてきた」

ついに怒りの矛先を彰子に向けた。

「あーあ……転校生、明日から肩身狭いぜ」

彰子はこのクラスの人気者だ。好く人は数多けれど、嫌う人など全くいない。皆無だ。

そんな彼女を、責めるということは 明日……いや、この昼休み終了後から皆に無視されるな。仕方ないだろう。

「あずみは、いい子なの……私は二人に、仲良くして欲しい」

「うっ……」

一瞬、そう、ほんの一瞬、葦村ミオの顔が歪んだ。

「真崎。できない。あんたもそう思うだろう？」

あずみは自分に突然振られたその質問に、「ショーコを苛めた人となんか、願い下げ」と言い、そっぽを向いた。

「私のことなんか、どうでもいいじゃない！」

その言葉の途中で葦村ミオはすでに、彰子に背を向けていた。

あずみは弁当のご飯を食べようと箸を動かしていた。

この件は、彰子の空回りということと落ち着きそう、と思った。彰子は、落ち込みながらも、あずみに声をかけられたら、席に着き、黙々と食べ始めた。

「おい、あんた」

渡部がいきなり、自分の席に戻ってきた葦村ミオに向かって、声をかけた。

「一人で食べるの、つまらんだろ。俺らとなら、班になれるか？」

彼女は　自分が声を掛けられたことに少しの間気付かなかった。

「え？ 私？」

「うん、葦村」

「渡部？ 何言ってるんだ？」

そう言っている池田が、実は彰子に惚れていることを私は知っている。

気に入らないのだろう。

「いいのか？」

そんな池田の思いとは裏腹に、葦村ミオは目を丸くして聞いた。

「うん。前の高校の話とか、聞かせて欲しい。そうそう、俺は渡部

こいつ安藤、こっち池田」

渡部は、スマイルで、私たちに指を指しながら、言う。

……私も、彼の思惑が皆目見当がつかない。

葦村ミオは自分の机を寄せ、

「よろしく、渡部、池田、安藤」

と、お辞儀した。

あずみグループ　特に彰子が、驚いたように見ている。

……優越感を感じるのは、何故だろう？

「二週間後は体育祭だと聞いた。全身全霊で身体を張らせていただ

く

いきなり葦村ミオ　ミオはそう言って、にやりと笑った。

多分、今まではただの準備だったと、そう思う。
ここからが、スタートだったのだ。

面白友達　コミカルフレンド達との、物語が。

4、練習

「体育祭はクラス対抗、土日をかけて行われる。競技はドッジボール、二人三脚、リレー、障害物競走、玉入れ、台風の日、騎馬戦。二人三脚と騎馬戦以外は希望制。でも規定人数あり」

ミオに説明すると、彼女は目を輝かせた。

「もう、組は大体出来上がっちゃっているからね。まあ、この時期なのが幸いしたのかな？ まだ間に合うでしょ。どこに入る？ ……とか言つて、ドツジしか残ってないんだけどね」

「え？ リレーは？」

ミオはリレーにご執心らしい。

「リレーはもうとつくに選手決まっているよ。クラスで百メートル走速い人から順番に」

「私も百メートルは速い！ 滅茶苦茶速い！ 音神では雷少女ポルトガールと呼ばれていた！」

「……………あ、そう」

しかし。

音神つて平然と口にするのな…………。そりゃ、当たり前だけど。

「とりあえず！ このリレーで勝ちたいのなら、私は絶対に入れるべきだ！」

「そんなこと私に言われても…………」

「じゃあ、リレーの選手は誰だ！ そいつらの名前を教えてください」

「え、私、分からないよ。リレーの選手じゃないし」

「うわ、役に立たねえー」

さらつと役立たず呼ばわりされた。

けれど、こちらもそれをさらつと受け流した。

六月八日。

ミオが転校してきてから、既に二日。その間は幸いにも、何事もなかった。正直、何か嫌がらせされるのではないかとびくびくしていたのだ。

池田の目が不満の表れのようにどんどん濁って行ったが、それはもう諦めてもらおう。

彰子はもう、ミオには話しかけてこない。あの子にも人間としての暗さがあつたのだと思うと、それはそれは心温まるお話だった（擲揄も何もなく、本当にそう思う）。

「まあいいや。リレーの練習っていつか分かるか？」

「ああ、それなら確か、」

一瞬、誰かの視線が突き刺さった気がした。

誰なのかを考えることが怖くて、慌てて、言いかけたそれを別の言葉にする。

「あ、……明日の昼休みだったかな」

「嘘をついている」

本当はいつなの？ という言葉は、柔らかな口調でありながら鬼にも勝る迫力があつた。

「今日の……っ、放課後です」

思わず敬語。

「ありがとう」

人が足りないドッジボールには必ず参加するからさ、とミオは言う。

「リレーだけは、させてもらおうか」

あと私に嘘をつくのは無意味だよ、と言ってミオは自分の席に戻る。

私は今まで、この人が嘘を見破るのが得意だということを忘れていた。

そして、些細なことで彼女は火をつけられるということも、つい忘れていた。

「千佳」

放課後、掃除当番の一人である私は教室のゴミ捨てのため、焼却炉へ急いでいた。

軽やかな声に、振り返る。

「……あずみ」

私に声をかけたのは、体操着姿のあずみだった。

一人だ。そして何故か 疲れている。

「どうしたの？」

しかし、この時点で何が起こったのか私はほぼ了解していた。

「千佳は、アレの味方なんだよね？」

「……味方でもないけど、敵ではない」

「そんな中途半端を、認める気はないわ。今、ここで、敵か味方が選択してくれる？」

鬼気迫るものを感じた。

「何があったの？ リレーの、選手なんだよね？ あずみは」

「抜けたわ」

「え……？」

あずみは、この前の体力テストで百メートルにおいて十二秒を叩き出した女子だ。リレーでうちのクラスが勝つには、彼女の力は必要だ。

「あの女の百メートルタイム、知ってる？ 十一秒六」

「じゅう、いち」

下手すれば オリンピックに行けるレベル。

「あの女、自分も選手にしてくれって言うてきた。無理だっけ言うたら、『私はお前らより俊足だ』ってね。だから、試した。あいつと、選手全員で百メートルやったわ。補欠の生徒に、タイム計ってもらってね。そしたら……全員突き放して、そのタイム」

しかも、とあずみは一拍呼吸を置いてから、続ける。

「あいつ、息を切らしてなかったのよ」

ふざけてるって思わない？

「選手にするしかなかった。……あたしは、やめた」

「どうして、あずみがやめるの？　そこがよく分からない」

「仲良くなれない」

仲良く？

あずみの言っていることが分からない。

「天敵だわ。それでいて、あたしは勝てない」

そんな奴のそばにいたって、惨めなだけでしょ？

あずみはそう言って、自嘲気味に笑んだ。

「で、千佳。あいつの敵になるの、味方になるの？」

私は、決してミオの敵ではない。だが、味方かというところも答えきれない。

そういうことを考えて、友達を作ったことなどなかった。

あずみは目の前の人間が敵か味方かを　ずっと考えて、友達を作っているのだろうか。

なんだか、とても怖くなった。

私は、どうしようもない臆病者で、卑怯者だ。

人を嫌うのに、自分が嫌われるのは嫌だ。

その考えに、どんなリスクがあるかを知っていても。

「私は、音神は決して好きではないから」

「んー。そういうえば前、不安だっって言ってたもんねー」

あずみは少し表情を崩し、わずかに笑んだ。

「ありがとう」

私は、ミオが好きか嫌いかという質問に答えていない。

でも、あずみはその言葉で何らかの解釈をしたようだ。それを、私を知ることがもうできないと思う。

「ちよっと練習、見に行こう」

私はそう声をかけた。

「え？ でも、千佳、掃除当番じゃん」
「気にしないで」

私のことなど、どうでもいい。
気になるのはとにかく、ミオだ。

「安藤」

ミオは息を切らしていた。

どうやらついさっきまで、散々走っていたらしい。他の選手達はすっかりばてていて、グラウンドに転がっている人までいる。

「どうやら、ミオが散々特訓をしたようだ。」

「どうした？ 私の勇姿でも見に来た 訳じゃないのか」

私の後ろのあずみを見つけたらしい。

柔らかなそれが、一気に鋭くなる。

「篠原」

「楽しそうね」

「楽しいさ。だが、この面子では勝てない」

「え」

「お前の力が必要だ。戻れ。いや、戻ってくれ」

言い直してもあまり変わっていないが、それはともかく。

あずみに、助力を頼んだ？

ミオとて、あずみに好感は持っていないだろう。むしろ、敵視している可能性が高い。それなのに。

「嫌よ」

あずみは当然のように、そう言った。

「私は、あんたのこと、嫌いなんだから」

「私だってお前は嫌いだ。それでも頼んでいる。」

お前の力が必要だ」

ミオは、さっきと同じ言葉を繰り返す。

「頼む、戻ってくれ」

勝つ為には、

あずみは、目を丸くしている。

ミオが、深々とあずみに頭を下げたからだ。

ばてていたはずの全員が、いつの間にかこちらに注目している。

「……っ、分かったわよ」

周りの視線に耐えられなくなったのか、はたまた、ミオの態度に根負けしたか。

あずみは、咳くように言う。

「協力するのは、今回限り」

「構わん」

そして、にへら、とミオは笑った。

とても無邪気な顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4799h/>

コミカルフレンド

2010年10月9日22時09分発行